

[others]

「定年を迎えて」

長崎大学医学部・歯学部附属病院勤務 43 回生 今泉 美治



昭和 43 年 3 月、母校卒業と同時に長崎大学病院に就職し、40 年が経過しようとしています。(退職は再雇用でおそらく 1 年先になると思いますが...)

その年のレ専校卒業生には長崎出身が 3 名おり、劣等生の私は郷里の就職を諦めていましたが、その年に全国の大学病院が中央放射線部へ改組し、高エネルギー放射線治療、核医学分野へ業務を拡大し、診療 X 線技師の大幅な増員募集があり、小川哲夫、松尾英典両氏と共に長崎大学病院に採用された次第です。

3 人で話し合っ、4 月 1 日に一緒に病院に行くことに決めて、つかの間の息抜きで、母と関西方面を旅行して帰省したところ、当時の高尾技師長が「3 月中に採用手続きをするから明日から来なさい」と通告され、慌てて他の 2 名に連絡した記憶があります。当時のおおらかさは、今は何処にもありません。

当時の職場は大半がレ専校の先輩であり、公私とも援助していただきましたが、後ろを振り向くと、30 名中 3 名と寂しい限りです。

平成 13 年 4 月に当院診療放射線技師長に就任した時は、神澤、久保両君が他の国立大学病院の技師長で既に活躍しており、本当に心強かったです。その後西村君が三重大学の技師長に就任し、同級生が 4 名も国立大学病院の技師長とは珍しいと話題になりました。

人の先頭に立つことが苦手な私に、皮肉にも長崎県放射線技師会長(8 年)、放射線技師長(7 年)、医療技術部長(3 年)と大役が回ってきました。就任から今日まで改革の嵐が続々と押し寄せ、消化不良のまま去ることは心残りだろうと、非常勤で残るよう有り難い(?)通知がありました。

在任期間中、新人の採用は非常勤(5 年雇用)ばかりで、無理に母校から瀬川敦史(短大 13 回生)を紹介して貰いましたが、たまたま常勤枠が空いて、採用試験をした結果、彼がダントツの成績で常勤になり、西谷先生に恩返しできたと思っています。

母校は私の卒業後医療技術短期大学さらに医療科学大学となり、後輩の皆さんは、西院の島津製作所の社員寮内にあった校舎を全く知らないでしょうね。本年 4 月、待望の大学へと変身し、卒業生から大学教官に就任した人も 8 名(うち 1 名は山田名誉教授)おられると聞いています。うれしい限りです。

結婚以来、前半は技師会活動で、後半は技師長職で家庭を犠牲にしており、定年を前に、5 月に神澤・久保夫妻と北海道旅行へ、又 11 月に「業務改善のための米国視察団」の同窓会に家内同伴で青森へ出かけました。世に言う「定年離婚」防止に効果がありますように...

この激動の 40 年間で、大過なく全う出来たのは、熊谷誠先生をはじめレ専校の諸先輩、同級生のおかげと感謝しております。紙面を拝借し心より御礼申し上げます。後任は現在全国公募中であり、若い力に期待したいと思います。

「40 年を振り返って」

大津市総合保健センター勤務 43 回生 寺田 義男

2 月上旬に職場に電話があり、受話器を取ると同窓生の神澤君からで、開口一番「今年退職や

な」と言われ、何も考えず「うん」と返事をすると同時に『学友だより』に投稿を依頼され承諾後、引き受けた事を後悔しました。



卒業後 40 年経っても、2 年間学んだ学舎や懐かしい思い出が鮮明に浮かんできます。就職時には、生涯この職場で技師生活を送る心構えで勤務をするが、職場環境に順応する前に先輩技師と些細な意見の違いで退職し、次の職場では、前回の事を踏まえて 39 年余り勤務し現在に至っております。

さて、就職して初めてする仕事の多くは暗室作業や撮影準備に追われる日々が続く中、空いた時間にポジションングや撮影条件等を見聞きしながら一人前になりたいと努力した事が、この年齢になっても生かされていると感じている。

当時は単純撮影や胃腸透視そして放射線治療などを主に行っており、『基本となるのは一番簡単であり最も難しい胸部撮影だ』と医師や先輩に教わり今でも満足する写真(アナログ)が撮れないことが多いので、リタイアするまで努力する必要がありそうだ。そして、我々医療界でも目まぐるしくアナログからデジタル化に進み高度医療機器(CT・MRI 等)の発達により、専門的な知識がより必要になり、技師も医師同様に専門分野のみ詳しくなる事を危惧し、色々な画像に対して読影できる能力と知識が重要であると私自身考えております。

最後に、この紙面をお借りしまして母校の今後のご発展を心からお祈りいたします。

「退職にあたっての思い出話」

三重大学医学部附属病院勤務 43 回生 西村 廣一



当時は、まだレントゲン技術専修学校と呼ばれていた時に入学いたしました。まだレントゲンなるものは、胸部の集団検診の撮影装置しか知らないときでした。

大学入試に失敗して、周りの友人達は浪人するつもりであり、小生も浪人をするか、料理学校等の専門学校に入学するか迷っていたときに、従兄弟が本校の出身であったため応募願書を届けてくれました。家からも近いこともあり、軽い気持ちで願書を提出に行きますと、1次募集の締め切りが終わっていたにもかかわらず1次募集での受付をしていただきました。しかし、まだ、集計ができていないため、番外(101番)の受験番号を頂き、試験当日に小生だけ他の受験生から離れた机で受験をしたことが思い出されます。

入学してみると、全国から年齢層も異なる学生が集まり、今までに経験をしたことのない世界がありました。今のような立派な校舎もなく、学校と呼べるような建物ではありませんでしたが、学友はみんな志を持ち、和気藹藹と助け合い、協力し合っ家庭的な雰囲気のある楽しい学校生活を送ることが出来ました。卒業を間近にひかえた、12月23日突如、今は亡き滝内校長に呼び出され、今の就職先である県立三重大学医学部附属病院に面接だけでも行くように要請がありました。

翌日早速、三重県に赴いた訳ですが、当時の大学病院は、母校よりも少し建物は立派でしたが、老朽化の目立った病院でした。面接と言っても技師の先輩達の紹介をしていただいただけでした。帰りに、本校の1年先輩に居酒屋に連れていただき帰りの時刻を気にしながら、お酒をごちそうになったことが思い出されます。その先輩とは、以後、公私にわたりお世話をおかけすることになりました。年が明けると学校に採用通知が届いていました。

当時、放射線技師は今のような就職難では無く、大学病院と本校とは先生方同士のつながりがあったため、故滝内校長、事務方から「3年で呼び戻すから、三重大学に行くように」説得され、3年

が 40 年の長きにわたりお世話になりました。40 年の間には、大学病院の新築移設、国立移管、法人化と色々と思い出されます。

本校は歴史もあり、たくさんの優秀な人たちが医療界、関連業界に沢山活躍しておられます。小生の就職先にも先ほど述べました先輩を含め3名がおられ、何かにつけ助けて頂き、お世話になりました。世の中に出て、歴史のある学校であることを身にしみて感じ、母校の卒業生だと胸を張って言えるということは、先輩、後輩のおかげだと感謝しております。念願の 4 年制の大学になり、ますます、本学が発展していくことを祈念し稿を終わらせていただきます

以上

* 通巻 187 号 2008 年 4 月 10 日発行(H20 - No.1)より